

「一冊の本との出会い」

佐賀女子短期大学 名誉教授 白根 恵子

御紹介いただきました白根と申します。

まず、先日の豪雨で、被害をお受けになった方々、それから、避難指示の中で不安な時間を過ごされた方々に、心からお見舞いを申し上げます。

さて、私は、御紹介に預かりましたように長い間、福岡で県立図書館の司書として仕事してまいりましたが、私自身が仕事として、子どもの本、子どもたちの読書に関わるようになったのは、もう40年以上前のことです。その当時、実は椋鳩十先生に何度かお目にかかって直にお話を伺う機会がございました。そして、多くのことを学ばせていただきました。

そこで、その椋鳩十先生が提唱された「母と子の20分間読書運動」の発祥の地である、この鹿児島でこのような場で話をさせていただく機会を作ってくださいました鹿児島県立図書館の館長様ほか職員の方々、関係者の皆様方、そして今日ここに、御来場いただいている皆様方に心から感謝申し上げます。光栄に思っております。

ここまでは挨拶をしっかりと考えたので、うまくいったのですけれど、今、心臓がバクバクしております。先ほど、実践発表で「ぐるんぱ」さん、「ぱすてる」の方々のとっても楽しい発表を聞かせていただいて、気持ちが楽になったので、これで大丈夫と思っていたのですが、いざ、ここに立ちますとやっぱり、ドキドキしますね。そこで、最初に私自身のこのドキドキを鎮めるために、ストーリーテリング、お話を一つ、みなさんに聞いていただきたいと思います。



今日は7月7日ですから、この日に七夕のお話をしないという手はありませんので、七夕のお話をしますが、この話は、皆様がよく御存じのものとは、少し違うと思います。中国の昔話で、王母様という女の神様が出てきたりします。では聞いてください。

（「たなばた」をストーリーテリング）

『たなばた』（君島久子再話・初山滋絵 福音館書店）という絵本のお話を元にして、少しだけ言葉だけで分かるように手を加えて、お話させていただきました。このたなばたの話をするたびに、一人の男の子のことを思い出します。その子はTちゃんとしておきますが、Tちゃんは、私が、福岡県立図書館の子ども図書室で司書をしていた頃に、お話の時間に毎週欠かさず出席してくれて、一番前のこの左の辺りに座ってお話や絵本の読み聞かせなどを、口を半開きにして、聞いてくれるようなとっても聞き上手の男の子だったのです。ですから、お話の時間で何を読もうか何を話そうかというときに、「Tちゃん

は、これが好きかな。」と、つい考えてしまうような男の子でした。

ところが、ある時期から、Tちゃんの姿がお話の時間から、それからもちろん図書館からもぷつりと見えなくなったことがあったのです。こちらから来てちょうだいで言いに行くわけにもいきませんので、どうしたのかなあ、来ないかなあと思っていたところに、久しぶりに顔を出してくれたのが、ちょうど、7月の初めぐらいだったと思います。

ですから私は、Tちゃんのためにと思ってたなばたをお話の時間に語り始めました。ところが、その時、こんなことになってしまったのです。

「昔、天の川の東に7人の天女がおりました。」と語ると、Tちゃんが、続けて、「天女がおりました。」

あれ？

「天女たちはみんな機織が上手で、美しい雲を織っていました。」

「織ってました。」

文章の終わりになる度に、終わりの部分をおうむ返しで繰り返してくるのです。これではお話になりません。それまで、お話を途中でやめるなどしたことはなかったのですが、その時は、初めて途中でやめて黙りました。そしたら、Tちゃんも含めてみんなシーンとなったので、「では、もう一度最初からね。」と言って、初めに戻ってお話をしたのです。

今度は、Tちゃんも、ちゃんと最後まで聞いてくれました。お話の時間が全部終わった後で、Tちゃんに、

「どうしたの、Tちゃん。今日はおばちゃん困ったなあ。今度からこんなことしないでね。」

と言って、別れたのですが、それから数日たって、Tちゃんのうちの近所の方が本を借りにこられた時にちらりとかうおっしまったのです。

「今、Tちゃんのところ大変なんですよ。お母さんが入院なさってるんです。」

それを聞いて私は「しまった。」と思いました。あんなにお話が好きだったTちゃんが、とても信じられないような行動を示した、あれはTちゃんからのSOSだったのですよね。ですから、「おばちゃん困るなあ。」じゃなくって、しっかり抱っこして、

「何かあったの。」

って、聞いてあげなきゃいけないかった。自分の未熟さに本当に歯がゆい思いをしました。その当時4歳のTちゃんにとって、心の基地であるお母さんがいないという状況は本当に不安で、苦しい状況だったのだらうと思います。

七夕の話をするたびに思い出すTちゃんです。もう多分40歳ぐらいになっているのではないのでしょうか。子どもたちに、たくさん本を読んでくれているお父さんになっているといいなと思っています。

さて、今日は、「1冊の本との出会い」というテーマでお話させていただくことにしました。こちらに「親子1冊読書 1日20分読書で出会う心に残る1冊の宝本」と書いてありますが、「宝本」っていい言葉だなあと思っているところです。私は、子どもたちが、その子にとっての1冊の本に出会うということが、その子の一生にわたって、その子を支え続けてくれる、あるいはその子の人生を変えてくれる。そういう力があるのではないかと考えております。

私自身も、1冊の本に出会って助けられた経験があるのですが、私自身の経験は少し後でお話する

ことにしまして、最初に、「春よ来い」という文章を読ませていただきます。この「春よ来い」という文章は、大分昔の本で、『本という奇跡～「心にのこる私の一冊」より～』（NHK-BS「週刊ブックレビュー」編 メディアパル）という本の中に入っていた一文で、作家さんとかタレントさんとか、そういう方ではなくて、普通の方が、書かれたものなのです。そのまま読んでみます。『本という奇跡』の中に入っている30何点かの文章の中の1点です。

佐藤英里 23歳 群馬県 『春よ来い』

その本の表紙には、たどたどしいひらがな文字で、私の名前が書いてある。覚えての文字で当時幼稚園児だった私が書いたものだ。いつからだったかなどわからない。気が付いたら、大切な宝物になっていた。また、本棚の整理をするときは、紛れて処分してしまわないように気を付けていたのは、幼いころからの習慣であった。

冬眠中の動物たちが突然目を覚まし鼻をくんくんさせてかけていく。たどり着いた先には、雪の中、一輪の花が咲いている。『はなをくんくん』というたったこれだけの内容の絵本に、私がどれだけ生きていることの価値を見いだしたか、とても言葉では言い表せない。

私が初めて心でこの本を読んだのは、中学生の時だった。その頃私は、自殺を考えていた。私は高校に入るまで、本来の意味での友達を持ったことがなかった。それ以前は独占欲の強い同級生に親友気取りされ、彼女の奴隷となって、中学卒業までずっと耐えてきたのだった。そんな私が自殺を考えたのは、中学3年の時だった。珍しく私が親友に逆らって陰悪な仲になったことがあった。彼女は奴隷の分際私が逆らったことが、かなり気に入らなかつたらしい。さんざん嘲りの言葉を浴びせかけた上で、私のことを「生きている価値もない」と罵ったのだ。まだ子供だった私はその言葉を真に受けて、真剣に命を絶つことを考えたのである。来る日も来る日も死ぬことばかり考えていた。でも、心のどこかではなにかしらの救いを待ち望んでいたのかもしれない。

救いは私の本棚にあった。

その本にはうっすらとほこりが積もっていた。表紙には、『はなをくんくん』とあった。1ページ1ページ、かみしめるように読み進んでいく。そして最後のページではっと息をのんだ。何回も繰り返し読んで、良く知っていた内容なのに、まるで初めて読んだような衝撃を感じた。最後に動物たちが雪の中に咲く花を見つけて喜んでいるのを見たとき、私の心を凍らせていた氷が溶けていくような気がした。そして本の中の動物たちが、凍える真冬のような私の心の中にもいつかきつと、花の咲くときが来るんだと語りかけているように思えた。

「まだ死んではいけない、君はまだ心の春を迎えてはいないのだから。」

絵本の中の動物たちの笑顔が涙でかすんで、まるで実際に動きながら笑い転げているように見えた。そこで再び気が付いた。長い間本当の笑顔を忘れていたことを。涙を流すのを忘れていたことを。無表情で無感動のロボットのような私に、表情と、感動する心を取り戻させてくれたのは、この本にほかならない。楽しい時には笑い、悲しいときには泣くという、人間らしい感情を絵本の中の動物が思い起こさせてくれたのである。

という文章です。

佐藤さんが中学3年生の命の危機の時に、本棚からふと手にしたのは、この『はなをくんくん』（ルー

ス・クラウド文 マーク・シーモント絵 きじまはじめ 訳 福音館書店) という絵本です。御存じの方も多いと思いますが、絵はとてもシンプルです。ほぼ、モノトーンです。いろいろな生き物が眠っていますね。

(「はなをくんくん」の一部を朗読)

お話もとてもシンプルですが、最後にお花にだけ黄色い色が着けてある。そしてその花を見守る動物たちのうれしそうな笑顔。ここから、春の喜びが伝わってくるような気がします。黄色い花からは何か良い香りが漂ってくるような、とても暖かさの残る本だと思います。この本の力もちろん大きかったと思うのですが、佐藤さんが死ぬことばかり考えていたのにやっぱり「生きよう」と気持ちを切り替えることができたのは、この本だけの力ではないと私は思うのです。



佐藤さんがこの本と最初に出会ったのは、中学3年生のその時ではなくて、もっと前でした。文章の最初の方に、「その本の表紙にはたどたどしいひらがな文字で、私の名前が書いてある。幼稚園のときの私が書いたものだ。」とありました。ということは、佐藤さんは実は幼稚園の時、既にこの本と出会っていたのです。そしてその出会いは十中八九、誰かに読んでもらっています。多分お母さんではないかなと思うんですが、お母さんに、もしかしたら抱っこしてもらいながら、あるいはお布団の中で肌のぬくもりを感じながら、温かい肉声でお母さんにこの本を読んでもらいました。その時、幼稚園児の佐藤さんはとっても幸せな気持ちを味わったのだらうと思います。

その幸せな記憶が佐藤さんの心の中に残っていたからこそ、この本だけは処分しないでずっと持っていたのです。本棚に残してあったのです。そして、そういう思い出の詰まった本だったからこそ、中学3年生の命の危機の時にふと手が伸びて、読み返したのです。読み返しながらきっと佐藤さんの耳にはお母さんの声もよみがえっていたのだと思います。それらのことが、佐藤さんの心を励まして、「生きよう」というふうに、気持ちを切り替えることができたのではなかろうかと思っています。ちょっとオーバーな言い方ですけども、『はなをくんくん』と出会っていたことが、佐藤さんの命を救ったとも言えるのではないのでしょうか。

この話を私はいろんなところで、何百回となく話しておりますが、時々とってもいい話を聞かせてくださる方がいらっしゃいます。

もう10年ぐらい前のことですけど、北九州のある小学校で、この話をしました。そしたらお話は全部終わって私が帰り支度をしているところに、一人の方が近付いてこられて、「プライベートなことなので皆さんの前ではお話しませんでした。」と、御自分の息子さんの話をしてくださいました。

確かあれは、2月頃だったと思います。当時、息子さんは中学校の2年生になっておられて、その時

点では、学校に何とか通えるようになっていたけれど、中学校に入って間もなく不登校になってしまっ
て、学校に行けずに自分の部屋に閉じこもっておられる時期がありました。その時期、自分の部屋で息
子さんが何をしていたかという、幼いころにお父さんやお母さんが読んであげていた絵本をいっぱい
並べてあれこれ読み返しておられたのだそうです。

それを見てお母さんは、「中学生にもなって絵本？この子、赤ちゃん返りしたのかしら。」って大層心
配なされたのだそうです。でも、この『春よ来い』と『はなをくんくん』の話を知り、「あれでよかつ
たのですね。」って本当にほっとしたようにおっしゃいました。

私は、「お子さんが小さい頃にたっぷり本を読んであげてらっしゃったのですね。それはとても素晴ら
しいことだったと思います。きっとそのことが、お子さんの気持ちを支えたのですよ。」って申し上げた
んですが、間違いないと思っています。

今、子どもたちに絵本を渡すと、「こんなことをするのですよ。」っていう話をよく保育園や幼稚園関
係の方から、お聞きするのです。「どうぞ。」って本渡したら、こうやるのだそうです。(スマホをスクロ
ールする動作) そういう子がいるのです。

そして、この間もちょっとショックな話を聞きました。

読み聞かせをしていると、2歳ぐらいの子は自分の興味のある場面だと、時々立ってきて、指さしに
行きますよね。私の友人が読み聞かせをしていたら、パッとやってきた子がいるのです。指さすの
かなと思ったら、こうやったそうです(拡大する動作)。ちょっとショックを受けました。

子どもたちの暮らしの中にタブレットとかスマホとか、そういうものがもうかなりの率で浸透してき
ていて、統計上も増えてきているというのは分かっているのですが、タブレットやスマホには絵本アプ
リというのがあって、大変便利ですよ。私も見てみましたけれど、お話も聞ける、音楽も鳴る、「はら
ぺこあおむし」も動いたりするのですよね。

一人で楽しめるのだけど、タブレットじゃ、小さい子に読んでやるのは駄目だと思います。なぜなら
ば、絵本だったら、一冊一冊形が違います。表紙も違います。ですから、小さい頃に読んでもらった本
のことを忘れていたとしても、図書館や、本屋さんでこうやって表紙を見せて並んでいると、「あつ。あ
の本見たことがある。」手に取って読み返す中で、小さい頃お母さんに読んでもらったことを思い出すこ
とができると思うんですね。

私たち人間の記憶はやっぱり、においとか手触りとか、色や形や重さなどいろんな感覚、五感を通し
て定着していくわけですが、タブレットですと、全部形は一緒です。記憶のよすがには、なりません。
思い出そうと思ってもタブレットがそこにあっただけでは、何の記憶の手がかりにもなりません。
幼い子どもたちに読んでやるときは、基本はやっぱり絵本の形で、将来その子が大きくなって何かの時
に、ふと思い出せるように、絵本で読んでやってほしいなと思っています。

さて、先ほど不登校の話をしらっとしたのですけれども、この間、NHKだったと思いますが、番組
の中で不登校がテーマになっておりました。不登校には一応定義があって、その定義に合致する中学生
が全国で大体11万ぐらいいるそうです。それから「隠れ不登校」といって学校に行っているのだけれど
も教室に入れない子どもも。だから、保健室とか図書館、図書室など、別の場所で過ごしている子ども
たちが30万人ぐらいいるって言ってました。ですから40万人以上の広い意味での不登校の子どもたち
がいるってことです。ちょっとショックを受けたのですけれども、何か手立てがないものか、その
手立ての中に、「本・読書」ということが、あるのではないかと思いました。このことについては、まだ

私もいろいろ勉強不足なので何とも言えませんけれども、何か力になれるのではないかと考えています。

さて、「読書」が一体子どもたちにどんな力を育ててくれるのか、「1冊の本との出会いからはじまる読書」が子どもにどんな力を与えてくれるのか。そういうお話を少ししてみたいと思います。「読んでもらおう」ということを通して育つ力と、それから「自分で読む」ということを通して育つ力とがあると私は思っています。

ところで皆さんは、「子どもの読書活動の推進に関する法律」という法律は御存じでしょうか。平成13年の12月12日にできた法律なのですが、その法律の第2条が、基本理念を表している文言でこんなふう書いてあります。

「子ども（おおむね18歳以下のものをいう。以下同じ。）の読書活動は子どもが言葉を学び、感性を磨き、表現力を高め、創造力を豊かなものにし、人生をより深く生きる力を身につけていくうえで欠くことのできないものであることにかんがみ、すべての子どもがあらゆる機会とあらゆる場所において自主的に読書活動を行うことができるよう積極的にそのための環境の整備が推進されなければならない。」

この法律では子どもの読書活動は「子どもが言葉を学び、感性を磨き、表現力を高め、創造力を豊かなものにし、人生をより深く生きる力を身に付けていく上で欠くことのできないもの」としています。



本当に読書の意義をコンパクトに的確にまとめた素晴らしい言葉だなあと読むたびに思うのですが、幼い子どもたちが、私たちに「本読んで、本読んで。」って言うてくるときに、果たして、言葉を学ぼうとか、感性を磨こうとか、そんなこと思って「本読んで。」って言うてくるのでしょうか。違いますよね。ここに書かれていることは、読書が結果的にこういう力を子どもたちに、育ててくれますよ。という結果です。「子どもたちが本を読んでもらっている時に一体どんな気持ちを味わっているのか、そして読んでもらっているときにどういうことが子どもの心の中

中で起こっているのか、知りたいなあ。」と、長い間思っておりました。そうしたら、だいたいのことにはなるのですけれども、一人の女の子が私に教えてくれました。

それは、この、『クシュラの奇跡』（ドロシー・バトラー著 百々佑利子訳 のら書店）という本のクシュラです。この、女の子ですね、クシュラ。女の子の名前です。大変話題になって、著者のバトラーさん（クシュラの祖母）も来日、大野城市（福岡）でも講演会がありました。テレビでも取り上げられたと記憶しています。クシュラは染色体に異常があって障害児としてこの世に誕生しました。お医者さんからは、とても厳しい言葉が与えられたそうです。「肉体的な障害はもちろん、知的にもおそらく障害があるでしょう。外的刺激にはおそらく反応しないでしょう。」とまで言われたのだそうです。確かに、

たびたび発作が起こって、おちおち寝てられない、ということは、クシュラの家族も同じように寝てられないような、そういう生活が始まりました。実際にいろいろなおもちゃの音を聞かせても、いろんなもので触ってもほとんど反応しなかったそうです。ですが、クシュラが生後4か月のときに、両親がふと思いついてクシュラの目の焦点の合うところに、絵本を広げて置いてみたら、じっと見るようなそぶりを見せたそうです。確信はなかったけれど、もしかしたらわかっているのかなあとと思って、それからというもの、時間さえあれば、クシュラに絵本を読んでやる日々が始まったそうです。講演で聞いたかテレビで見たか、はっきりしないのですが「多い時には10時間ぐらい読んでいた」そうです。読んでやっている間しっかりクシュラを抱いて……。肌のぬくもりも感じながら、クシュラは読んでもらったのですね。なぜそんなに10時間も読んでやれたかというところ「クシュラに本を読んでやったのは、別にクシュラの知的な発達を促そうということではなくて、クシュラが本を読んでいる間、とても穏やかに過ごしている。そのことが、読んでやっている家族にとっても心安らぐ時間だったから」ということでした。これは、ブックスタートと根っこがつながっていますね。

そうやってたっぷり本を読んでもらって育った結果、クシュラは3歳を迎える頃には、肉体的な障害はどのようにもなかったのですが、知的な面では全く遅れない少女に成長したという記録が、この『クシュラの奇跡』という本です。この本の結論のところ、クシュラの言葉が書いてありました。そここのところだけ読んでみますね。

「1975年8月18日、3歳8か月のときに記録したクシュラ自身の言葉は、私たちが知るべきことを語り尽くしている。このとき、クシュラはソファに深く身を沈めて、両腕で布の人形を抱きしめており、そばにはいつものように、本の山があった。『さあこれでルービー・ルーにほんをよんであげられるわ。だって、このこつかれていてかなしいんだから、だっこして、ミルクをのませて、本を読んでもやなくてほね。』たしかにこれこそどんな子どもにも効く処方であるの。障害があろうと、なかろうと。」

と結ばれています。

クシュラの言葉はこの部分ですね、「さあこれでルービー・ルーにほんをよんであげられるわ。だって、このこ、つかれていてかなしいんだから、だっこして、ミルクをのませて、ほんをよんでやなくてほね。」この言葉はクシュラ自身が本を読んでもらっているときに感じていることを、表現しているのですよね。クシュラには障害がありましたから、そうではない子よりも、より悲しい思いをすることも多かったでしょう。より疲れることも、多かったと思います。

だけど、どんなに疲れていて悲しい気持ちのときでも、大好きな誰かに抱っこしてもらって、お腹もいっぱいにしてもらって、肌のぬくもりを感じながら温かい肉声で本を読んでもらったら、また元気になれる、幸せな気持ちになれるということを、クシュラは伝えてくれています。おそらく多くの子どもたちが本を読んでもらいながら、同じような気持ちを味わっている。そしてそのことが、子どもの心のどこかを育てることにつながっているのじゃないかなと思いました。

では、心の一体どの部分が育っているのか、知りたくなかったのですが、なかなかうまく説明してくれる人がいませんでした。ところが、これも大分昔の本なのですが、『いま、こころの育ちが危ない』（吉川武彦著 毎日新聞社）中で、児童精神科の吉川武彦先生が私にはわかりやすく教えてくださいました。この本の中で吉川先生は、人の心を三角錐にたとえておられました。三角錐ですから。こういう形ですね。

私たちは、よく人の心を知・情・意の三つの言葉で表現しますが、吉川先生は、知・情・意は心の三角錐の上の三つの面で、もう一つの面は心の三角錐の底面だとおっしゃるのです。底面ですから一番大事なところですね。心の上の三つの面を支える心の根っこといってもいいと思います。これは何かというと、吉川先生自身は「自分らしさ」というわかりやすい言葉を使っていらっしゃると思いますが、最近皆さんはよく、自尊心とか自己肯定感、という言葉を用いるところで目にしたり耳にしたりなさると思います。

少年事件が起こるたびに、尾木ママとかがね、よく最近の子供たちは、自尊心が育っていないというようなコメントをしていますよね。あれです。ぐっと砕けていうと、オンリーワンですね。いいところばかりではない。いろいろ欠点もある自分だけけど、このありのままの自分がこの世にたった1人のかけがえのない存在だと、無意識に思える力。これが「心の三角錐」の底面、心の根っこです。

この、自尊心「心の根っこ」の部分がこんなに広く豊かに育っていれば、安定した心ですが、どんなに知・情・意を、高々とそびえ立たせたとしても、底面がこんなに小さかったら不安定な心です。風が吹いたらパタンと倒れるでしょうし、何かぶつかったらポキンと折れてしまうかもしれません。こちら側の三角錐だったら、風が吹いてぐらっとしても何とか自分で元の位置に戻れるでしょう。何かぶつかってちょっと欠けることはあるかもしれないけど、折れることは少ないかもしれない。

私は、この「心の根っこ」、底面を育て育てる上で、読み聞かせがとても大きな力を持っているのではないかと考えています。自尊心を育てる上で読み聞かせは力がある。

それはどういうことかという、赤ちゃんの時はみんなだっこしておっぱいをやったり、話し掛けたり、いろいろやっていたかと思えます。それから、赤ちゃんのときから、絵本を楽しみながら育てていくと思いますが、子どもたちが少しずつ大きくなるにつれて、抱っこしてもらう機会は減ります。でも、絵本を読んでもらうときは、抱っこしてもらったり、傍にぴったりくっついて、温かい肉声で読んでもらうことができます。私は肉声も、スキンシップの一種だと思っているのです。

読み聞かせをするときには実際のスキンシップ、プラス声のスキンシップもあり、子どもたちの「心の根っこ」を育てる上でとても大きな働きを持っています。そういう意味で読んでもらいながら子どもたちは自分自身の「心の根っこ」オンリーワンの気持ちを育てていくことができます。もちろん、言葉の力とか想像力とかも読んでもらうことを通して育てていくとは思いますが、ここが一番、読み聞かせのいいところではないかと考えています。

自尊心が出たついでにちょっとその自尊心について皆さんに考えてみていただきたいことがあります。2011年ですからもう8年前の話になりますが、「日本青年研究所」というところが、アメリカと中国と韓国と日本の高校生に、アンケートをとっています。

その中に、「私は価値のある人間だと思うかどうか」という質問があるんです。答えは4択で「全くそう思う」「まあそう思う」「あまりそう思わない」「全くそう思えない」この4択です。「全くそう思う」と「まあそう思う」あわせて肯定的に「私は価値のある人間だと思っている」というふうにカウントしますと、アメリカでは、89.1%の高校生が、「私は価値のある人間だ」と回答しています。中国では87.7%、お隣の韓国では75%。さて、日本の高校生の何%が「私は価値のある人間だ」と回答したでしょうか。「アメリカ、中国にはちょっと及ばないだろう。」と思われる方が多いと思うので、お隣の韓国並み75%ぐらいと思われる方、ちょっと手挙げてみてください。60%ぐらいかなあと思う方手を挙げてみてください。いやあ、50%ぐらい？いやいや、40%かなと思う方？

はい。「36.1%」の高校生しか「私は価値のある人間だ」と回答してないのですね。謙虚な国民性というのがあるかと思えますけれども、これはあまりにも低いなと思いました。小さい頃にしっかり読み聞かせをしてもらうことで、この回答がぐっと上がるとかそこまでは残念ながら断言できません。断言したいのですが……。

でも、こういう調査もあるのです。これも同じ時期だったでしょうか。国立青少年教育振興機構というところが子どもの頃の読書は豊かな人生への第一歩。「読書好きの子どもは積極的」という見出しで調査の概要を報告しています。その中で、子どもの頃の読書は人生を豊かにし、子どもの頃の読書活動が多い大人ほど未来志向や社会性などの意識、能力が高いことがわかりました。また、子どもの頃に読書活動が多い人ほど大人になってボランティア活動に参加している人が多い傾向にありますというような結果が出ているのです。

子どもの頃にしっかり読書をして育った人は、大人になっても積極的に、いろんなことに取り組む力を身に付けている、こういう結果があるということは、やはり、読んでもらって、読書の楽しさを知ることが、自尊感情の育成につながるし、その人が積極的に生きてくことに役に立っているのではないかと思うところです。

さて、『クシュラの奇跡』や、先ほど紹介しました『春よ来い』に私を出会わせてくれるきっかけとなった1冊の絵本、そして、子ども図書室の仕事は随分前に離れている私を、ずっと子どもの読書と関わる道にいざなってくれた1冊の絵本との出会いの話をさせていただきたいと思います。

私が福岡県立図書館の子ども図書室の担当になったのは、私自身が母親になって、その産後休暇が明けて間もなくでした。40年以上前の話です。当時はもちろんブックスタートなんてありもしなかったのですけれども、子どもの本に関わる人たちの間では、赤ちゃんでも絵本が楽しめるということは、既に知られていました。私は同僚の先輩から「赤ちゃんがお座りできるようになったら本を読んでやるといいよ。」というアドバイスをもらいました。半信半疑でしたが、息子が4か月ぐらいで何とかお座りらしきものができたので、当時の赤ちゃん絵本の定番の『じどうしゃ』（寺島龍一画 福音館書店）という本を読んでやったというか見せてやったというか。文字は一切ありませんので自分で適当に言葉をつけながら、見せたのを覚えています。

この時は、新しいページがめくられるとじっと見るなあとか、ちょっと手を伸ばそうとするとか、そういう感じだったんですが、それからしばらく経って、7、8か月のときだったかしら。この本を読んでやりました。『いないないばあ』（松谷みよ子文 瀬川康男絵 童心社）。そうしたら、声を立てて笑って喜んでくれました。この本で私は、やっぱり1歳前の赤ちゃんでも、ちゃんと絵本が楽しめるんだな、ということを教えられたんですね。

そうやって、当時としては早い時期から、絵本に触れ合わせて育てることができたので、1歳を迎えるころには、毎晩何か読まない寝ないぐらいに絵本が好きになりました。読んでもらってですけども、2歳ちょっと前ぐらいから、この『ぐりとぐら』（中川李枝子作 大村百合子絵 福音館書店）が、大好きになりました。

毎晩、夫が読んだり私が読んだり、本当に毎晩のように読んでいた時期があったのですが、そのころちょっと面白いことがありました。この話をすると長くなるのですが、朝御飯の時に、卵を用意していました。目玉焼きだったか、お味噌汁に「ぽとっ」と落とすのだったか忘れたんですけど。「いただきます。」と言って食べようとしたのですが、息子がスプーンで卵をすくって、口に持って行かないで床

に「ぼん」と投げたんです。私はもちろん叱ろうと思ったのですよ。でも私が叱るより前に息子がうれしそうに「卵が落ちていました。」って叫んだので夫も私ももう叱るのを忘れて大笑い。ここですね。(本を指差す)

「まあ！みちの まんなかに とても おおきな たまごが おちていました。」

この場面を目の前の卵で再現したんですね。夫も私ももう、何度も何度もこの本を読んでいたから叱るのを忘れて大笑いになったのですが、この時、「読み聞かせ」って読んでやる側から言うと、ちょっと手間がかかりますが、一緒に読んでいたからよかったなと思いました。もし一緒に読んでなくて、当時はもちろんタブレットなんてありませんが、タブレットで子どもだけが見ていたら、迷わず叱ったでしょうね。2歳前後って、ものには名前がある、というのが分かり始める時期。絵の中の卵も卵、全然形が違う目の前のこれも卵、どっちも卵という名前なのだとすることに気が付いて、そのうれしさを表現していたところに、がつんと叱ってしまえば、気持ちがシューンとしぼんでしまいます。もしかしたら同じような何か発見があったとしても再現活動につながらなくなったかもしれないと思うと、「一緒に読む」ということがとっても大事、同じ世界を共有するということがとても大事だということを実感した瞬間でした。

こんなふうに『ぐりとぐら』までは、順調に本が好きになっていたのです。ですから、きっと本が大好きな子に成長するだろうな、と思っていたら見事につまずきました。なかなか人生はそううまくはいかないものですね。つまずきの原因を作ったのは私です。

3歳を前にして引っ越すことになりました。共働きでしたから引っ越すということは、家が変わるだけではなく保育園も変わります。ということは、先生も友達も変わるということです。それだけでも心の大きな負担だったでしょうに引っ越しの理由は二人目の子が生まれる、でした。夫の両親が全面的にバックアップしてくれるということになったので、私は何の心配もなく、出産のために引っ越し、2週間ぐらいたっていただけでしょうか。家を離れてしまいました。

そして無事二人目が生まれて、もちろんその間も夫と一緒に長男は私のもとを訪れていたのですが、本格的に、二人目の子を連れて、家に戻ったその晩です。もうその頃、大好きで何度も何度も読んでいた、先ほども出てきた『しょうぼうじどうしゃ じぶた』（渡辺茂男作 山本忠敬絵 福音館書店）だったでしょうか、自動車の本を、久しぶりに「膝の上で、読んであげようね」と言って、息子を呼んで読み始めたら、この本を読んでいた、それまで一度もそんなことはなかったのに、私の膝の上からフラッと立っていきました。呼び戻して読み始めるのですがまた立っていきます。何度も立っていきます。おかしいなと思ったんですが、お母さんがやっと帰ってきたと思ったら赤ちゃんまでくっついてきちゃって様子が違うというので、ちょっと気持ちが乱れているのだろう、1週間か2週間すれば元に戻ると、軽く考えてしまったのです。1週間たっても2週間たっても、他のもっと簡単な『ぐりとぐら』などを読んでやっても途中で立っていきます。「困ったな。」と思っているところに、新しく通い始めた保育園からは「お宅のお子さんは、お友達にかみつ



て困ります。」など、もろもろの注意をいただくようになりました。

それでも、もうちょっと様子を見てようと思っていたのですが、それからしばらくたって、息子のズボンの前が昼間でも「ビチョビチョ」に濡れているのに気が付いてさすがの私も慌てました。児童相談所に行こうかなと思ったのですが、さっき紹介していただいたように、私は臨床ではないんですけど一応、大学で心理学を勉強していて、知り合いが結構児童相談所に入っているのです。ですから「ちょっと待て。最終的にはお願いするけどそれ以前に自分で何かできないだろうか。」と思って考えに考えて、たどり着いたのがやっぱり本を読んでやろう、だったのです。それから祈るような気持ちで毎晩寝る前に本を読んでやっていました。

でも、ずっと途中で立っていく日が続いたのですが、たまたま三か月近くたったある晩、『かいじゅうたちのいるところ』（センダック作 神宮輝夫訳 富山房）を読んでやりました。そしたら一回読み終わったら「もう一回読んで。」もう一回読んだら、また「もう一回読んで。」結局一晩にこの同じ本を、4、5回、繰り返し、繰り返し読まされました。そして、その次の日の夜から、ほかの本もまた以前のように初めから終わりまでちゃんと落ち着いて聞き通すことができるようになりました。そして、それをきっかけに、その他のいろんな困った行動も収まっていたのですね。この『かいじゅうたちのいるところ』との出会いは私にとっては目からうろこの出会いでした。

たかが1冊の絵本ですけども、「一人の子どもの心とタイミングよく出会うと、その子の心を救ってくれる、立ち直らせてくれる、そんな力を持っているのだ。」ということを実感しました。それまでもすでにいろんなところで「絵本っていいものですよ。」ってお話してまわっていたのですが、それはあくまでも私が、絵本や他の方のお話を聞いて仕入れた知識のレベルでしかありませんでした。でも『かいじゅうたちのいるところ』と、ちょっと痛みを伴う出会いをして、私の本当に心の底からの感情となりました。絵本の力は素晴らしい。読書の力は素晴らしい。子どもたちを救ってくれる。そういう力があるのだということを実感したわけです。

それ以来、一人でも多くの子どもに、その子にとっての1冊の本、全ての子にこの本では絶対ありません。一人一人違うと思います。その子にとっての1冊の本。「宝本」と出会ってほしいと心から願うようになりました。残念ながら「こういう子にはこの本」っていうふういきちっと出会わせることは、不可能じゃないかなと思っています。けれど、私たちは「出会いのチャンス」を作ってあげることができます。だから、そういうチャンスを作ってあげたい、と思うようになりましたし、「絵本の力って一体どこから湧いてくるんだろう。その源にたどり着きたい」という思いが強まっていった、『クシュラの奇跡』とか、『春よ来い』とか、その他いろいろな本や文章に出会うことができたというわけです。読んでもらうことを通して育つ力、それは、親や家族の愛情をしっかりと受けとめて、まず自尊感情が育っていく、心の根っこがしっかりしたものになる、ということです。そして同時に、言葉の根っこも育つことになるということだと思っています。

そして、読んでもらうだけでなく、一人でも多くの子どもにやっぱり自分でも読んでほしいなと思います。自分で読むことを通して培われる力の一番大きな力は、それは、物事を客観的に、見る力かなあと思っています。メタ思考という言葉があるのですが、物事を一面的にではなく、いろんな角度からちょっと離れたところからね、いろんな角度から見渡す力ではなからうかと思っています。

そのことを私に伝えてくださったのが、美智子様です。美智子様の『橋をかける～子供時代の読書の思い出～』（美智子皇后 すえもりブックス）という本もありますけれども、私は実は、ビデオで美智子

様のお話を聞きました。この、美智子様のお話の中で美智子様は、御自分が幼い頃に読んだ本を、何冊か丁寧に中身も紹介しながら、そのとき自分がどんな気持ちを味わったかということをお話しくださったのですが、そのお話を聞いていると、自分で本を読めるようになった少女の頃の美智様が、自分で自分の心を耕して心の三角錐を育てていっているのだということを感じました。そして、物事をいろんな角度から見る力が育っているのではないかと思ったのです。美智様の文章を少し紹介させていただきます。美智子様御自身が読書についてどのようにお考えになっているかという文章なのですが、こんなふうに書いていらっしゃいました。

「何よりも、それ（読書）は、私に楽しみを与えてくれました。そしてそののちに来る青年期の読書のための基礎を作ってくれました。それ（読書）はある時には私に根っこを与え、ある時には翼をくれました。この根っこと翼は私が外に内に橋をかけ、自分の世界を少しずつ広げて育っていくときに、大きな助けとなってくれました。読書は私に悲しみや喜びにつき思い巡らす機会を与えてくれました。

本の中には様々な悲しみが描かれており、私が自分以外の人がどれほどに深くものを感じ、どれだけ多く傷ついているかを気づかされたのは、本を読むことによってでした。自分とは比較にならぬ多くの苦しみ、悲しみを経ている子供たちの存在を思いますと、私は自分の恵まれ保護されていた子供時代に、なお悲しみはあったということをひかえるべきかもしれません。

しかし、どのような生にも悲しみはあり、一人一人の子供の涙にはそれなりの重さがあります。私が自分の小さな悲しみの中で、本の中に喜びを見いだせたことは、恩恵でした。本の中で、人生の悲しみを知ることは、自分の人生に幾ばくかの厚みを加え、他者への思いを深めますが、本の中で、過去現在の作家の創作の源となった喜びに触れることは、読むのに生きる喜びを与え、失意の時に生きようとする希望を取り戻させ、再び飛翔する翼を整えさせます。悲しみの多いこの世を子どもが生き続けるためには、悲しみに耐える心が養われるとともに、喜びを敏感に感じ取る心、また、喜びに向かって伸びようとする心が養われることが大切だと思います。

そして最後にもう一つ、本への感謝を込めて付け加えます。読書は人生のすべてが決して単純でないことを教えてくれました。私たちは複雑さに耐えて生きていかなければならないということで、人と人との関係においても、国と国との関係においても……。」

美智子様のお話を通して本当に、本を読みながら子どもたちが自分自身で、自分の心を育てているということが伝わってきました。

美智子様のお話で紹介された、新美南吉の『でんでんむしのかなしみ』、最近また取り上げられておりましたね。それから、たぶん福永武彦氏編集だろうと思いますが、日本の神話の中の「日本武尊と弟橘媛尊の話」も紹介されていた記憶がございます。

子どもたちは、本を読みながら自分の心を育て、そしてメタ思考、物事を客観的に見る力を育てています。それから、最初に宝本の説明があったときに、人生の予習になるということをおっしゃっていたかと思いますが、本の中でまだ自分は体験してないが、もしかしたら将来体験するような体験を主人公とともにすることができます。それは人生の予習にもなりますよね。そして、本の中にはもしかしたら自分の周りにはいないかもしれない、すばらしい人がいるかもしれないし、自分の周りにはいないものの、すごくひどい人もいるかもしれない。そういうことが書いてある、そういう本と出会うことで、子どもたちは自分の心を鍛えていくことも、できるのではないかなと思います。

メタ思考と人生のシミュレーション、それからもちろん知識の本を通していろいろな知識を身に付けることができますね。ですから、一人でも多くの子どもに自分で本を読むようになってほしいと思います。けれども、残念ながら読書離れ活字離れということはずーっと、前の東京オリンピックの頃から言われ続けているんですね。私は実は図書館で働いている頃に、読書離れ活字離れっていうけれど、何かちょっと違うなっていう感覚を持っていました。

「子どもの読書離れ活字離れ」というと、子どもの方が勝手に本から離れていっているような、そういうニュアンスがちらっと漂うのですが、それは違い、子どもたちは、自分たちの方から、本から離れていっているんじゃないかと思っていたのです。学校図書館関係の知り合いにそういう話をすると、「それは、あなたが勤めているのは公共図書館だもの、公共図書館って、本が好きな子がわざわざ行くところでしょ。」って言われるのだけど、公共図書館に来る子が、全部本が好きかというところではないのですね、私が勤めていた図書館の近くに、アパートがありまして、そこに小学校3、4年生のいわゆるギャングエイジの男の子のグループ4、5人のグループが住んでおりました。その子たちは学校が終わるとパーッと子ども図書室に来てくれるのだけど、本には一切関心を示しません。暴れ回るので、お話の時間に誘っても、「いや、僕たちはいい。」とか言ってお話の時間は外に出ていっちゃうような子たちだったのです。

あるときでも、もしかしたら、あの子たちもこれなら聞いてくれるんじゃないかと思って『じごくのそうべえ』（田島征彦作 童心社）を押し売りしました。「ちょっと面白い本があるから聞いてみて。」そしたら、とっても喜んで聞いてくれただけではなく、それからしばらくたって私が何かで休んだ次の日の朝です。私が出勤して子ども図書室のドアを開けるなり、奥から同僚が飛んできて、「ちょっと聞いて、聞いて！昨日ね、昨日ね……。」何事があったのだろうと思ったら、『悪そう坊主たち』（博多弁でいたずらっ子ことを『悪そう坊主』っていうのです）自分たちからよ、自分たちから、この本読んで、って『じごくのそうべえ』ば持ってきたとよ。」ってうれしそうに報告したので、私、心の中で、「やった！」と思いましたね。あんなに本には関心がなさそうに見える子どもたちでも、読んでもらって面白いと思ったら、今度は自分たちの方から「読んで！」って言ってきます。これは「本離れ」じゃなくて、「本離し」？というのかしらね。何かちょっと違うなと思いました。

それから、またしばらくたったころのことですが、ある時、一人の初めてみる男の子がふらっと図書室に入ってきて、本棚を見回して、私のところにやってきて、「漫画の本はないんですか？」って聞きました。漫画の本は置いてなかったのですが、そのまま返すのは悔しいと思ったので、『おばけのバーバパパ』（チゾンとテイラー作 山下明生訳 偕成社）を持ってきて、「漫画じゃないけど、ちょっと近くない？」と言って、また押し売りです。そしたら、たいそう気に入ってくれて、これはシリーズですので、ずっと「おばけのバーバパパ」シリーズを借りに通ってくれました。当時小学校2年生でした。「バーバパパシリーズ」を読み終わるとそれから間もなくして、ぽったり姿が見えなくなったので、私はこの子のことはすっかり忘れていました。そしたら4年後になりますけれども、一人の



そしたら4年後になりますけれども、一人の

少年が（私よりも背が高かったですね。）やってきて「僕のことを覚えてますか。」って言うのです。「ごめんなさい誰だったっけ。」って言ったら「僕、Mです。」って名乗ってくれたのは、私が『おぼけのバーバパパ』を紹介した、男の子の名前でした。M君はちょっと誇らしげに「僕、今学校で一番本を読みますよ。」って教えてくれました。うれしかったです。もしかしたらですが、それまで、漫画の面白さしか知らなかったM君が『おぼけのバーバパパ』と出会うことで、漫画以外の本も面白いということに気付いてくれたのではないかと。そしてそれがきっかけとなって、本の世界に飛び込んでいってくれたのではないかと思うと、私司書をしていてよかったなって思いました。

こういう体験がありましたので、本離れ、活字離れという子どもの方から離れていっているような響きがあって、「仕方がないよね。」みたいなニュアンスがあるのだけど、そうじゃないって思っていたのです。それを確信に変えたのは、これももう10年ぐらい前の話ですが、福岡市内のある小学校から、ゲストティーチャーとしてブックトークをしてほしいという依頼があった時のことです。

依頼の内容は、小学校5年生を対象に、国語の研究授業の一環でブックトークをしてほしいということでした。5年生の教科書に椋鳩十さんの『大造じいさんとがん』が、載っている。間もなくその「大造じいさんとがん」を学習する予定なので、それに先立って、「動物」というテーマで、椋さんの『片耳のオオシカ』を入れて、椋さんの人となりも……とかいろいろ条件がありました。でも、準備期間が2週間あるかないかだったので、テーマを動物にすること、それから椋さんの『片耳のオオシカ』を入れることだけでいいなら行きましょう、ということで出かけました。

その時、随分早めに着いたのですがそれが、ラッキーでしたね。子どもたちが、読書が好きなグループと、読書が苦手なグループに分かれていろいろ意見交換をする、そこを見せてもらうことができたのです。本が苦手な子はどちらかといえば男の子が多くて、なぜか、その本が苦手な子の方がせつせつと発言していましたが、ある男の子がこう言いました。「どうして、字が小さくて絵の少ない本を読んで面白いんですか。想像しろって言われるけれど、僕は絵がなかったら想像できません。」それに対して、本が大好きな女の子がこう答えました。「字が小さくて絵の少ない本でも、文章を読んでいくと、頭の中に次々場面が浮かんできて、楽しく読んでいくことができます。下手な絵がついていると、かえって邪魔です。」

同じ5年生ですよ。本が苦手と思っている子は、「絵の助けがないと想像できない」という読書力のレベルにまだいます。本が好きな女の子は、「下手な絵なら、ない方がマシ」大人とほぼ同じ読書力のレベルにいるのですね、同じ5年生でも、読書力のレベルは学力以上に差がある、ということを実感しました。ややもすると、5年生が、例えば薄っぺらな本とか読んでいると、「5年生だから、もうちょっと厚くて字の小さい本読んだら？」などと言いがちですが、一人一人の子どもの、読書力のレベルに合う本を、しかし、とても面白い本を手渡すことが必要なんじゃないかということ、その時に実感しました。

子どもたちのディベートのあと私にも質問が来て、ある子がこんなこと言いました。「先生はいつ本を読むんですか。」そこで、ちょっと嘘を交えて、「通勤の電車の中や、おうちに帰って家の仕事が済んでから。」と答えました。実は面白い本であると家の仕事は途中でも、本の方にいっちゃうところがあったんですが、教育上どうかなと思ってそんな答えをした後で、その子に「そういうあなたは本を読む時間がないのかな。」って聞いたら、「はい。」って言うのですね。そこで、「あら。お母さんにいい加減にいなさいって言われてもずっとテレビ見たり、ゲームしたりすることってあるんじゃない。」と言うと、正直に「はい。」っていうので、「それは本を読む時間がないじゃなくて、あなたがまだ本当に面白い本と出会ってないからじゃないかな。5年生だからといって、字の小さい厚い本を読まなくていいのよ。」

その時ブックトークに入れていた、『火よう日のごちそうはひきがえる』（エリクソン作 フィオリ画 佐藤涼子訳 評論社）を見せて、5年生がこんな本読んでもいいんだよ。薄い、字も結構大きいし、挿し絵もたっぷり入ってる。これを5年生が読んでもいいんだよ。5年生が絵本読んだっていいんだから」と言っておきました。

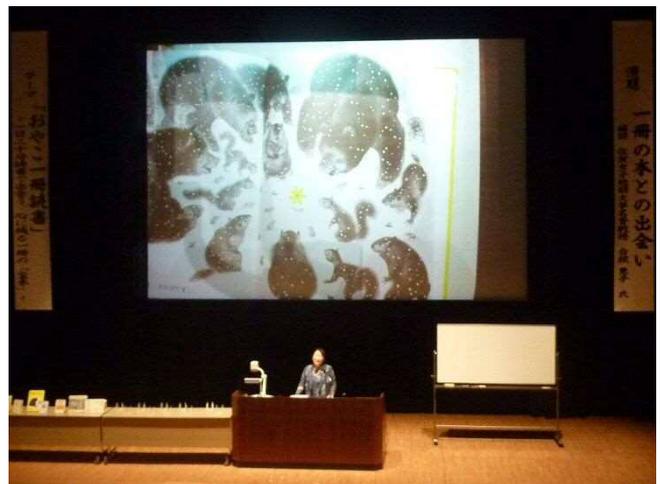
そして、研究授業が終わって、2週間ぐらいたってくださったでしょうか、その学校から報告の電話がありました。「あれ以来5年生の間で、朝の何とかタイムに『図書室に行こう』が合言葉になっています。最近では本が苦手な子どもたちが、低学年の図書室に行って『ふしぎなかぎばあさん』（手島悠介作 岡本颯子絵 岩崎書店）などをせっせと借りております。」という報告をいただき、行ってよかったと思いました。教室の関係で仕方がなかったのかもしれませんが、その学校では、図書室が低学年・高学年あるいは低学年・中学年・高学年と分かれていたのでしょうかね。となると5年生の子が仮に絵本を読みたいと思っても、低学年の図書室には入れなかったでしょう。子どもたちってプライドがありますからね。低学年の図書室に入っているのを誰かに見られて「あー、あの人5年生なのに低学年の図書室に入ってる。」なんて言われたら、プライドずたずたです。でも、本のプロとして出かけた私が「5年生が絵本読んだって構わない。薄い本読んだって構わない」って言ったことで、ちょっと心の縛りが取れたかと思うと、行ってよかったと思いました。

それからもう一つ、ブックトークをした直後にも面白い体験をさせてもらいました。ブックトークが終わると、子どもたちは、集まってきていろいろ話してくれるので、私にとっては幸せな時間です。それで子どもと話をしていたら、担当の先生が「ちょっとこっちに来てください。」って私を引っ張られます。何事だろうと思ってついていきました。「あれを見てください。」って、指差されるのは、一人の男の子がいつの間にか『片耳のオオシカ』の入っている椋鳩十さんの本を持って行ってその場で読みふけている姿でした。珍しくありません。ブックトークでは中身を紹介しますので、面白そうと思って読んでいるのだろうと考え「あの子がどうかしましたか。」と聞きました。

そしたら、その先生がおっしゃるには「いやーあの子は、僕たちが今まで、『君たまには本を読んで御覧。』って何回進めても、『いや僕は、本はいいです。読書はいいです。』と言うような、本が苦手な子だったんですよ。」っておっしゃるのです。にわかには信じられなかったけれども、よくよく見たら確かに本が苦手なグループで積極的に発言している、何人かの一人だったのです。椋鳩十さんの『片耳のオオシカ』って、不思議な感動の残る作品ですよ。お読みになった方はたくさんいらっしゃると思いますが、作品の何かが、彼の心を打ったのだろうと思いました。

でもしばらくたって、よくよく考えると、もしかしたら彼は、私たちが「読書」というと、つい勧めたくなる、読むと何かしら心が優しくなるような物語性の強い、そういうものではない、もしかしたら科学的な本、動物の本とか、自然科学系の本とか物語以外のものが好きだったのかもしれないと思いました。

この経験を通して、子どもたちに本を手渡すとき、一人一人の子どもの読書力に見合う本、それから、



一人一人の子どもの興味に見合う本，そういうものを，手渡していかないといけないのではないかとこのことを痛感したわけです。そして，ただ「この本を読んで」って，リストを渡したりするのではなく，中身をちゃんと紹介することも大事だという気がいたします。

子どもたちがなかなか自分で読むようにならない理由としては，一つには，読み聞かせをしてもらう体験が，少なかったということもあるかもしれません。それから，読むことが苦手と思い込んでいる場合もあります。最近では，ディスレクシアなど，文字を文字として認識しにくい子どもたちも結構いるということが分かってきました。そういう子どもたちには，リーディングトラッカーだったり，マルチメディアダイジーだったり，いろいろな手立てが必要となります。

普通に文字が読める子の場合は，なかなか面白い本と出会えないために，読むことが苦手って思い込んでしまっているケースもあると思います。ところが，本が苦手と思っても，自分の興味のある本に出会うと，その場で読むような子も，いるわけですね。

面白い本となかなか出会えない理由の一つに，どんな本を読んでいいか分からないということがあります。子どもたち自身は本の情報を持っていません。主な情報源は先生や友達からの口コミですね。例えば今ですと『かいけつゾロリ』（原ゆたか作 ポプラ社）ですか，そういうものがバァッと広まって，ほかの本に手を伸ばすことがない。ですから，本のことをよく知っている大人が，ボランティアの方や図書館員，学校図書館員，先生方が，「こんな面白い本があるよ。」と中身を伝えながら，いろいろな本を手渡していくことが大切なのではないかと思います。

自分で読むように自然に移行させていくための方法として，小学校の低学年ぐらいまでは家での読書は，子どもが自分で読むと言わない限り，読んでやって全然構わないと思っています。もちろん，子どもが読むという時は子どもに読んでもらって，それを親が聞くというのもとても素晴らしいことだと思います。

中学年になると，積極的な親御さんでも，さすがに「そろそろ一人で読んだら。」っておっしゃる方が多いと思います。もちろん中学年だとかかなりの子が，ゾロリレベルだったら自分で読めるようになっていきます。私が，司書している頃は『わかったさん』『こまったさん』シリーズ（寺村輝夫作 あかね書房）が大流行でした。子どもの知的レベルには幅がありますが，これらの本は，子どもの知的レベルの下の部分に合う本なのです。子どもの知的レベルには幅があって，もっと上もありますから，この手の本ばかり読んでるとやっぱり飽きてしまいます。そういうところに，少女漫画とかが入ってくると，大人の世界もちょっと入っているから，そちらにだァーっと流れていったりするんですね。これを防ぐためには何が大切かというところ，自分で読むにはちょっと手が出ないけれど読んでもらえばわかる，知的レベルの上部に合致する本を誰かが少しずつ読んであげることが，とても大事です。

例えば『アルプスの少女ハイジ』は完訳本ですと，福音館版はとても厚いです。岩波少年文庫ですと上下に分かれています。だけど，読んでもらったら，3，4年生の子がちゃんと分かる，そういう文章で書かれているのです。そういうものを読んであげることが欠かせないと思っています。それができるのは，家庭，そして，学校の先生なのです。学校の先生にお話する機会があるときは，是非是非と言っています。ものすごくお忙しいということよく分かっていますが，一年間通してなんて言いません。一冊でいいから読んであげていただけませんか，お願いして回っているところです。そうやって，いろいろな方法で，子どもたちに本の楽しさ，本の世界ってこんなに深くて豊かなのだ，ということを伝える手だてというものを考えていく必要があると思っています。

子どもたちの読書は、やはり周りの大人がどう取り組むかに大きく影響されています。

見えづらいかもかもしれませんが、ここに昨年の5月に行われた学校読書調査の結果をまとめたものがあります。過去数十年分が折れ線グラフで、表示されていますが、2005年～2006年からぼんとはね上がっています。5月の1か月間に読んだ本の冊数です。本の冊数が全てではないのですけれども、2005年ぐらいからぼんとは1か月間に読んだ本の冊数が伸びているのは理由があります。それは先ほど申しました、「子どもの読書活動の推進に関する法律」が、2001年の暮れに成立して、それに基づいて、国が「子供の読書活動推進の基本計画」というのを立て、義務ではないのですけれども、多くの自治体が推進計画を立てるようになりました。国は、昨年の4月に第4次に移行しました。国、自治体、そして先ほど、第2条を読ませていただきましたけれども、子どものいるところ全てで、子どもたちが自主的に読書に手が伸ばせるような環境を作ろうという動きがあったわけです。朝の読書も広まりました。

子どもの読書に対して、社会的な関心が集まって、子どもたちにいろんなところで、読書への働きかけが盛んになりました。そうしたら、こういう結果に結び付いたわけです。ですから、子どもたちが本を好きになるかどうか、読書に親しむかどうかは、大人次第だと言えらると思います。最近では、読書が子どもが生きる上で本当に大切だということが、心の育ちとかとは違うところからも言われています。

『A I VS 教科書の読めない子供たち』（新井紀子著 東洋経済新聞社）A Iと私たち人間が、別に対立関係にあるわけではないんですが、A Iを人間がしっかり使いこなして、幸せな生活をするためには、A Iにできないことを人間がしなければなりません。そのためには、考える力、思考力が大事なのですが、思考力を支える言葉の力、言葉の力をつける読書、読書力、読解力、これを付けることが、とても重要だという、そういう時代に来ています。私たち大人がしっかりと子どもたちに読書の楽しさを伝えていかねばならないのではないかと思います。そのために、鹿児島県のこの取組「1日に20分読書で出会う心に残る1冊の宝本」「宝本との出会い」を作ろうというこの取組は、すばらしい取組だと思います。

ここで私の話を終わろうと思ったのですが、もう一つ紹介する本を忘れていましたので、追加させてください。私の心に残るもう1冊の本です。子どもと一緒に出会ったもう1冊の宝本です。私には息子ばかり3人おります。一番下の息子が今年32になったかな、その上の子が40歳です。真ん中の子と



一番下と8才歳が違います。ですから家での読み聞かせの相手は、子育ての後半ではもちろん一番下の息子でした。一番下の息子が保育園の年中さんのときに、ある晩、お布団に二人で入って、『こすずめのぼうけん』（エインワース作 石井桃子訳 堀内誠一画 福音館書店）を読もうとしておりましたら、当時中学生だった真ん中の息子がその辺を動物園のクマみたいにウロウロするのですね。目ざわりだと感じ、追い払おうと思って、声をかけました。「あんたも久しぶりに読み聞かせ聞かんね。」そんな幼稚なことはもう結構とって逃げて

いくと思ったのですね。ところが私のもくろみに反して中学生の息子は「うん。」と素直に返事をしたばかりか、当然という顔つきでトットトットと近付いてきて、空いている方にすっと潜り込んだのです。

中学生ですよ。私ちょっと、気持ち悪いと思いました。だけど私の方から久しぶりに「どう？」って誘っているから、「気持ちが悪いからあっちへいけ」とは、さすがに言えなくて、素知らぬ顔で読み始めました。御存じの方も多と思いますけれど、子すずめがお母さんすずめと暮らしていて、間もなく巣立ちのときを迎えることになりました。飛ぶ練習が始まります。「今日は最初だから、石の塀のところまで飛んでいったら帰ってらっしゃい。」ってお母さんに言われるんですが、子すずめは石の塀のところまで楽々飛んでこられたので、「これなら僕世界中飛んでいける。」と言って約束を破って飛び出します。ところが案の定しばらく行くと疲れてしまって、休むところを探していたらカラスの巣がありました。そこでカラスに、「すみませんが中へ入って休ませていただいいていいでしょうか。」と頼むと、「お前『カーカーカー』って言えるかね。」「僕『チュンチュンチュン』ってきりいえません。」「じゃあ中入れてやるわけにはいかんな。お前俺の仲間じゃないからな。」と断られてしまいます。仕方なくまた探していると、山バトの巣がありました。ここでも同じように断られ、ふくろうの巣穴でも、鴨の巣でも同じように断られ、とうとう飛ぶ力をなくしてしまって、地面をぴょんぴょん跳ねていると、やっぱり向こうから地面をぴょんぴょん跳ねてくる鳥の姿がありました。子すずめはもうすっかり自信喪失し、「僕あなたの仲間でしょうか。僕チュンチュンってきりいえません。」と、こちらから言うと、「もちろん仲間ですとも、私はあなたの、お母さんじゃないの。」お母さんが迎えに来てくれて、無事巣穴に戻ることができました、というお話です。

3～4歳の子に読んであげると子すずめが断られるたびに顔が曇って行って、お母さんが出てくると曇った顔がぱっと晴れわたるので、3～4歳の子に読んでやるのが大好きでした。子すずめも3、4歳の子だと思っていたのですが、中学生の子がそばにいますと、中学生にも思えたのも不思議でした。中学生の息子も、初めから終わりまで途中なんの邪魔もせずにおとなしく聞いて、読み終わったら「じゃあ、おやすみ」といって自分から部屋に戻っていきました。

後で気が付いたのですが、あの日、中学生の息子はどこかで何か嫌な思いをしていたのかもしれない。学校で先生に叱られたか、友達とけんかしたか、とにかく嫌な思いをしていたのでしょう。ちっちゃい頃だったら「今日、学校でこんなことがあって……」って泣いて訴えれば気が晴れたかもしれないけれども、中学生にもなってそれはできません。だけど気持ちは収まらなくウロウロしているところに、久しぶりに読み聞かせどうって声がかかったので、もう気持ちは10年ぐらいパーッと戻って、3～4歳の子どもの気持ちになって、お布団の中に飛び込んできたのかなと思いました。そして、母親のぬくもりをしばし感じて、温かい肉声での読み聞かせを聞き、少し気持ちが収まったのではないかと思うと、家の中に読み聞かせという習慣が続いてよかったと思いました。

私は子どものために本を読んでやっているつもりでしたが、私の気が付かないところで、たくさん私自身が救われ、そして、私自身が育てられていたのではないかと思っています。

長い間、ご清聴ありがとうございました。これで、私の話を終わらせていただきます。